未来の大学経営を拓く 戦略的キャンパス移転・再配置

CONTENTS

移転・再編で変わる大学の「キャンパスと経営戦略」

Case Studies ① 関東学院大学

Case Studies ② 立命館大学

人口減少時代を生き抜く、地方大学のキャンパス戦略

Case Studies ① 徳島文理大学

Case Studies ② 北海道医療大学

編集長の視点

少子高齢化の進展と18歳人口の減少、グローバル競争の激化、そして急速な技術革新。日本社会が直面するこれらの構造的変化は、高等教育機関、特に大学に対し、従来の枠組みを超えた変革を強く求めている。かつて、大学の立地は歴史的な経緯や広大な土地の確保といった要因によって決定されることが多く、必ずしも社会や産業界との密接な連携が前提とはされていなかった。しかし、現代において大学は、社会課題の解決、新たな価値の創造、そして地域経済の活性化を担う「知の拠点」としての役割をますます強く期待されている。

このような背景のなか、近年、日本の大学において、キャンパスの移転や再編が活発化している。特に顕著なのが、郊外に位置していたキャンパスを都心部や産業集積地に移

転する動き、あるいは既存キャンパス内での学部再編や新設による機能集約・特化である。この動きは、偶然や一過性のトレンドではなく、各大学が自らの存在意義と競争力を高め、持続的な発展を遂げるための戦略的な経営判断として推進されている。

この特集では、なぜ今、多くの大学がキャンパスの移転や再編に踏み切るのか、その背景にある具体的な課題と、それを乗り越えようとする大学の明確な「狙い」に迫った。多くの大学が直面する課題の一つは、学生の多様化する学習ニーズとライフスタイルへの対応である。公共交通機関の利便性が高く、学業以外の活動機会も豊富な都心キャンパスは、多様な学生を惹きつけるうえで大きな魅力となる。弊社が毎年実施している「進学ブランド力調査」でも、進

学先選びの重要項目として、「交通の便が良い」は1位となっている。また、企業や研究機関との連携を強化し、共同研究やインターンシップの機会を創出することで、学生の実践的な学びを深め、卒業後のキャリア形成を強力に支援することも重要な目的である。さらに、リカレント教育の需要が高まる中、アクセスに優れたキャンパスは、社会人の学びの機会を拡大し、大学の生涯学習拠点としての機能強化にも寄与する。

一方、産業集積地への移転や学部再編は、特定分野における教育研究の高度化とイノベーション創出を加速させることが期待できる。企業との共同プロジェクトや人材交流を活発化させ、最新の技術トレンドを教育に迅速に取り入れることが可能となる。これは、学生に最先端の知識と技

術を習得させるだけでなく、大学が社会のニーズに応える研究成果を生み出し、その成果を地域社会や産業界に還元するイノベーションのハブとしての役割にも繋がる。

本特集では、実際にキャンパス移転や再編を成功させた大学の経営トップへの詳細なインタビューを通じて、各大学が直面した課題、そしてそれを乗り越えるためにどのような戦略を描き、実行してきたのかを紹介する。その言葉からは、未来を見据えた大胆な経営判断と、それを支える教職員一丸となった取り組みが読み取れるであろう。写真とともに詳しく紹介される新キャンパスの様子は、今後の大学経営におけるキャンパス戦略の可能性を示唆する。この特集が、貴学のキャンパス戦略を検討されるうえで、新たな視点と具体的なヒントとなることを願う。